



## 【インフルエンザワクチンについて】

### <はじめに>

インフルエンザは毎年冬には必ず大流行する「かぜの親玉」です。

インフルエンザが重くなって、肺炎・気管支炎・中耳炎・熱性けいれんなどを起こして入院治療をしなければならぬ方が少なくありません。中には、脳炎・脳症・ライ症候群・顔面神経麻痺・横断性脊髄炎・ギラン・バレー症候群・心筋炎などになる方もいます。また不幸な転帰をとられる方もあります（1999年1月～3月で、「インフルエンザの経過中に脳炎・脳症になった例」は全国に217例で、そのうち5歳以下が179例（82.5%）で、また5歳以下で50人が亡くなっている）。こういった方々はワクチン接種を受けなかったお子さん方でした。

平成6年の予防接種法の改正によって、学校・幼稚園・保育園でインフルエンザワクチンの集団接種をしなくなりました。そこでインフルエンザワクチンは自分の意志で受けなければなりません（任意接種）。

インフルエンザワクチンが効かないと思っている方がいますが、残念なことです。もちろんインフルエンザワクチンを受けていても、インフルエンザに100%かからないとは言えませんし、疫学的にきちんと証明されてはいません。しかし、日本人の幼児（特に5歳まで）に多い脳炎・脳症がワクチンによってかなり予防できている可能性はきわめて高いと思われます。発病防止効果や、重症度を軽くする効果については、あると言えますが、低年齢児よりも年齢の高い子でその効果がはっきりしています。

### <毎年接種しなければならないのは、なぜ？>

インフルエンザウィルスは、毎年少しずつ性質を変化させて流行します（抗原変異）。同じ地域でも変異の仕方の違うウィルスが同時に流行しているときもあります。それぞれのヒトがこれまでに獲得したインフルエンザの免疫力だけでは十分対応できないことが起こりうるので、一生の間にインフルエンザに何度かかかることとなります。ですから、次のシーズンに流行するだろうと専門家が予測したウィルスで作られるワクチンは、多くの場合、前年に使用されたワクチンの内容とは違っています。インフルエンザワクチンの効果は、だいたい半年くらいで、1年もすると抗原変異したウィルスには対応できなくなります。そのためインフルエンザワクチンは毎年接種しなければなりません。今年接種しておけば、翌年接種するワクチンの効果が高くなることわがわかっていきますので、毎年受けることによって免疫の獲得が高まります。

なお、インフルエンザワクチンには、流行予測されたウィルス株のAソ連型、A香港型、B型が3種類とも含まれています。

### <接種時期は？>

インフルエンザが流行しない年はありません。流行期は、1月の終わりから2月にかけてが多いのですが、シーズンによっては12月に流行のピークが来ることがあります。流行期の前に接種をすませて免疫を獲得して流行期をやり過ごすためには、**10月から12月上旬ころまで**に接種しておきましょう。

流行し始めても、インフルエンザワクチンの接種はできます。年長児以上の場合、たいてい過去にインフルエンザにかかっているのので、1回注射しただけでも速やかに免疫を得ることができる可能性が高く、無駄にはならないと思います。

### <何歳からできるのか？>

乳児でも6か月以上ともなれば、ワクチンにより抗体上昇は得られます（免疫ができる）。たくさんある予防注射の中で、インフルエンザワクチンは最も安全性の高い部類のワクチンです。まったく免疫のない乳幼児は、インフルエンザウィルスにとっては思う存分暴れることのできる「おいしい」存在です。

だからこそ、6か月以上5歳くらいの年齢層に積極的にワクチン免疫を与えてあげたいのです。

高齢者（65歳以上）、呼吸器系や心臓血管系の慢性の病気をもっている方、糖尿病患者などは、インフルエンザにかかると生命にかかわるほど重症になることがありますので、ワクチンの接種が勧められます。

### <接種回数と間隔は？>

**13歳以上（中学生以上）は1回**のワクチン接種で済みますが、**13歳未満（乳児・幼児・学童）は2回**の接種が勧められます。ワクチンの効果だけからいけば少し長め、**3～4週間間隔が良い**と思います。1～4週間と書いてあるので、もしかぜをひくなどで4週を過ぎたらいけないと思う方がいるかもしれませんが、そういう場合は5週とか6週でもかまいません。1週後に2回目をするよりは良いと思います。

インフルエンザの流行期にすでに入っている場合は、少し早めて1～2週間隔でしなければならなくなります。

### <1回接種でも効果はあるの？>

とくに年長児については、過去に感染した免疫的な記憶もあるので、1回接種でもかなりの効果が期待できます。しかし、低年齢児では過去の罹患歴に乏しいため、2回接種が望ましいとされています。ただ、毎年接種を受けている場合は、翌年1回の接種でもある程度は効果があると思われるかもしれません。はじめて接種を受ける低年齢児が1回接種でどの程度の効果があるかについては、詳しいデータがありませんが、まったくしないよりは良いと考えられます。

### <卵アレルギーとインフルエンザワクチン>

インフルエンザワクチンに含まれるインフルエンザウィルスを増殖させるために、発育鶏卵を使います。このため卵アレルギーのはっきりしている小児への接種は、注意して接種する対象者となっています。インフルエンザワクチンの製造では、受精卵のニワトリ胎児の尿膜腔にウィルスを注入して増殖させたものを回収します。ですからワクチンの製造過程のいずれの段階でも、卵白、卵黄が製品に混入することは考えられません。しかしながら、卵アレルギーのある児への実際の接種経験はごく少数であり、はたして安全に接種できるものか否かは不明です。

当院では、卵アレルギーがあると過去に診断されていて卵をまったく食べていないお子さんや、卵を食べると明らかな症状が出る（皮膚の発赤・発疹、下痢、顔面蒼白、呼吸困難など）お子さんについては、接種を控える方が良いと考えています。ただし、卵アレルギーと診断されたことがあっても、現在卵を食べて何もないというお子さんは接種をしてもまず大丈夫です。

### <副反応について>

注射を受けた部位が赤く脹れる程度で、発熱や頭痛などはほとんどありません。インフルエンザワクチン接種による副反応が、他のワクチン接種に比して高頻度であるとの証拠はありません。また重い副反応があるとも言われていますが、接種した後に偶然ほかの病気が発病したのか、ワクチンが関係しているのか、判断が難しいものがほとんどです。そのような例を数えても、150万人に一人以下というまれなことです。

このワクチンは不活化ワクチンですから、副反応が出るとすれば製品に含まれる成分に対する即時型反応か、あるいは接種後24時間以内におこるかも知れない遅延型反応による症状です。即時型反応はアナフィラキシ

一（強くて急激なアレルギー症状）で、じんましん、接種局所の発赤・硬結、呼吸困難などが接種後約 30 分以内に起こる可能性があります。ですから、ワクチン接種後は約 30 分間くらい医院内にとどまって、様子を観るのです。遅延型反応は接種局所の発赤・硬結や全身の発疹の形をとることが多いようです。

### <将来のインフルエンザワクチン>

現行のインフルエンザワクチンは皮下に接種することによって血中に高い IgG 抗体を誘導し、その結果、鼻腔内や気管内の粘膜に IgG 抗体が浸出して感染の拡大を防ぎ重症化軽減に働きます。したがって、現行ワクチンの投与方法は感染防御の面からはあまり効率的ではない免疫応答に依存していることとなります。投与方法によってはウイルスの感染経路である気道（鼻～咽頭～気管）粘膜に IgA 抗体を誘導することができれば、ワクチンの効果をより高めることができ、感染防御に機能するワクチンにもなります。そのため、経鼻接種ワクチンの開発が進められています。いずれ、皮下接種という注射の形ではなく、鼻の孔から噴霧する形のワクチンになるでしょう。

## 【子どもの歯について】

Woopy 通信では、これからも『子どもの歯と口のケア』に関する情報を連載していきます。今回は、乳幼児の歯ならびとむし歯について、また指しゃぶりについてです。

### <歯ならび>

- ① 乳歯の歯ならび：乳歯では、歯と歯の間にすき間があっても異常ではありません。乳歯よりも大きな永久歯がはえるためのスペースが準備されているのです。3 歳までに歯ならびと上下の噛み合わせがほぼできあがります。はじめのころ上下の前歯が歯の先端で噛み合っている（先端咬合）、乳歯の歯ならびでは正常な範囲とされています。
- ② 永久歯の歯ならび：永久歯との交換は 6 歳臼歯（第一大臼歯）にはじまります。そして問題がなければ、ずっと先になってはえる親知らずを除いて永久歯の歯ならびは 12 歳頃までに完成します。第一大臼歯から順次はえ代わって、問題がなければきちんとならんでくれますが、一見順調に見えても気がついたら前歯がねじれていたり前後に互い違いになってしまうこともあります。また最後になって、それまできちんとならんでいたところに八重歯が出てくることもあります。いずれもかかりつけの歯科医との相談が必要で、場合によっては矯正治療をすすめられるかもしれません。

### <乳児のむし歯>

乳児のむし歯の進み方はとても早く、数か月のあいだに急に大きな穴が開いてしまい、しかも数本の歯が同時にボロッとくずれるのが特徴です。それでもまだ痛がらないという子どもが多いのです。

#### 1. ほっておくと痛くなります

そのままにしておくとやがて夜中に急に痛みだしたり、顔がはれて熱が出るほど悪くなることがあります。

#### 2. 乳児のむし歯は永久歯にも影響します

乳児にむし歯が多かったお子さんは永久歯もむし歯になりやすいことがわかっています。理由は乳歯のときすでにむし歯がふえて危険な状態のままになっているからです。

### <指しゃぶり>

#### 1. 子宮の中で指しゃぶり

超音波を使って子宮の中の胎児の動きを観察すると、胎生 14 週くらいから胎児が手を口に持っていく様子

がわかります。そして胎生7か月を過ぎるころになると胎児が子宮の中で自分の指を口に入れてしゃぶる、いわゆる指しゃぶりが観察されます。胎児の指しゃぶりは生まれてからの哺乳の練習と考えられています。

## 2. 3歳までは心配ありません

子どもの指しゃぶりは年齢によって意味が異なります。低年齢のときはあまり気にすることはありませんが、4,5歳から小学生になっての指しゃぶりになると、単なるくせだけではなく心理的な問題、発達上の問題などが関係することもあり、放置できなくなることもあります。4,5歳まで続きますと噛み合せに影響が出ることもありますので、年齢との関係を考えてかかりつけの歯科医に相談してください。

## 3. 赤ちゃんの指しゃぶり

0歳児の指しゃぶりはあまり心配はありません。指しゃぶり自体、異常なものではなく、もともと生理的なものです。自分の指を吸うということは赤ちゃんにとってたいへん気持ちのいいことらしく、不安をやわらげてくれたり気持ちを落ち着かせてくれるものと言われています。

しゃぶり方もいろいろで、ただ指をくわえているときと、しっかり吸い込んでいるとき、また噛むようにしているときといろいろです。しゃぶる指は親指が多いようですが、ほかの指のこともあります。

## 4. 1歳児の指しゃぶり

この時期の指しゃぶりは生理的なもので悪いことはありません。歯への影響も心配ありませんので、あまり神経質にならずにお子さんとのふれあいを大切にしてください。いずれ自然にとれてきます。ちょっと緊張したときに本能的に安心するために指をしゃぶることが多いようです。

歩けるようになったり、手先が器用になり遊びや興味の対象が広がれば、指をしゃぶることもいつの間にか忘れてしまうことでしょう。

## 5. 2歳児、3歳児の指しゃぶり

昼間はしなくなっても、夜寝るときになると指がお口にいつているという場合が見られます。心理的に落ち着きたいときに多いようです。さびしいとき、不安なとき指をしゃぶりながら自分の精神を安定させています。

叱るのはよくありません。前歯を押し出してしまうことがあります。指しゃぶりを止めれば元にもどりますので、歯ならびや噛み合わせに対する影響も、そう心配はありません。やめさせようと注意したり叱ったりする必要はありません。

### <歯科医院へのかかり方>

ほとんどの場合、歯科医院へ行くのは口に何かの異常や病気を見つけてからではなでしょうか。でも、はれたり痛くなったりしてから診てもらっても、口の中の健康を確認するために歯が生えてきたら一度受診することをお勧めします。

はじめて歯科医院を受診する際、

#### ① 持っていくもの

保険証と乳幼児医療証、母子手帳、お子さんがいつも使っている歯ブラシ

#### ② つれて行く人

お子さんの様子をよく知っている責任のある保護者がつれていってください。